

かささぎ 通信 第45号

2016年5月13日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一六年四月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和9年7月号初出の三作品を読みました。「三人」（森三郎）、「バイオリン」（秋本末男）「絵馬」（芳村つや）

「三人」は、六年生の「私」と、いとこの松ちゃん、それに早川君のそれぞれの進路についての思いを描いた作品です。早川君のお父さんはお百姓さんで、自分の果たせなかった夢を子どもに託して医者になりたいとの思いから、早川君を中学に進学させようとしています。でも勉強に自信のない早川君は、中学受験の結果も不安です。中学へ行くより、奉公に行った方がのんきでいいと、親の思いと自分の気持との間で悩んでいます。一方、いとこの松ちゃんは、卒業したら町の下駄屋へ小僧に行くことが決められていて、「いやだなあ。僕、中学へいきたいなあ。」と思っているのです。松ちゃんのお父さんは職を転々としてたり、事業に手を出して失敗したりし、とうとう友達を頼って単身、北海道の夕張炭鉱へ行ってしまったという状況で、中学進学はとても無理な話でした。「私」の家はというと、松ちゃんのお父さんの借金の肩代わりで、屋敷も土地も売り払うことになり、中学へやってくれと泣いて頼んだけれど、それどころではなくなっていました。それぞれの思いで運動場の隅のベンチに腰掛ける三人の耳に、卒業式の歌の練習をするオルガンの音が聞こえてくるのです。

「作品を読む会」の中では、三人三様の胸が締め付けられるような思いは、当時の読者の子どもたちにも我が身に置き換えて、よく伝わったのではないかという感想と、童話としては、子どもたちに希望が見えないことに物足りなさを覚えるという感想とに分かれました。

この作品については、酒井晶代氏が「森三郎童話選集 かささぎ物語」解説の中で、日本近代文学館の『赤い鳥』復刻版解説・執筆者索引」中の関英雄氏の解説を紹介されています。関氏は子ども心の屈折を巧みに描いた作品として「雪」（昭和8年4月号）と、この「三人」を取り上げています。

中学受験に対する葛藤の話は、「秋蟬」（名義 小林七葉、昭和9年2月号）が記憶に新しいところですが、「かささぎ通信40号参照」また「三人」の中の松ちゃんのお父さんは台湾の砂糖会社に勤めていたこともあり、台湾のバナナの話が出てきたりします。朝鮮に行く人の話（「かささぎ通信」43号参照）に続いて、当時の社会状況がうかがえる題材です。

「絵馬」は、村の庚申さまのお堂に上がっている絵馬を題材にした話です。主人公の清子の村では願掛けや成就のお札に絵馬を奉納する習慣がありました。ひ弱だった清子のためにおばあさんが庚申さまにお参りし、丈夫になったお札に奉納した絵馬が、お堂には今もかかっています。級長の原田さんが、左目を患って長く欠席し、その間副級長の清子が級長になります。その後、清子は、庚申さまのお堂に平がなの「め」の字を左文字で書いたら新しい新しい絵馬を見つけ、お母さんから「左の目を患っていて、治った人が上げた絵馬でしょう。」と教わります。

「作品を読む会」の開催された日、2016年4月8日は丁度、60日に一度の「庚申の日」だという指摘が、会員の中からあり、偶然の一致に会が和みました。「ハーモニカ」（昭和8年10月号）にも隣村との分かれ道に三匹猿のついた庚申塚が立っている話が出てきました。読み続けるおもしろさを感じています。

次回予定 平成28年6月10日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和9年7月号初出作品「めぐりあひ」

（森三郎童話選集「かささぎ物語」所収）